ものでは、眞黑になつて、メーソンの側へ集まつて行きましたがこれは、尤のことです。

然るに今日になつては、時勢が一變し、唱歌遊戯等もなるべく、子供に適し言葉も曲も、なるべく簡單なるものになつて居るやうで誠に結構なことゝ思ひます。又一方では、非常な歐化主義も、段々日本主義と融化して眞個の教育的唱歌遊戯も生産すべき時代となり、一時すたれたる日本の古傳説や童謡に基づいて、子供の歌謡遊戯等を作り、又其曲も日本風に作ることの研究をなさんことを唱導する者も出てきましたのは、甚、喜ぶべきことゝ思ひます。

要するに、フレーベル、其他の教育者のいへる如く唱歌遊戯等は大人の氣に入る譯ではなく、子供の心情にたち入り、子供の樂となり、子供の爲になるものであるべき眞理は變らないのです。かく私が述べたのも、いさゝか古きを尋ねて新しきを知るの材料にもならむかと存じて御咄いたしましたわけであります。

研究

教育の眞義

石井國次

實驗心理學の證明する所によれば人は皆自然に快を求め不快を避くるものなり胎兒の運動嬰兒の活動より小兒大人の行爲に至るまで其間衝動的本能的無意識的意識的等の區別はありとも要するに人類一切の行爲は皆快を求め不快を避くるにありといへり。

この事はニウトンの發明したる引力の定義の如く自然に斯くあるなり人類は皆此法則を脱する能はずといふ

一の自然法なり然れば吾人は如何にしても此自然法を打毀す能はず、若し打毀さんと盡力することありとも全く無功なり。

快を求め不快を避くるてふ自然性を變化して不快をも求め、快をも避けしむといふことは到底企及すべからざる事とすれば則吾人の務め得る範圍は只快とする所の事柄不快とする所の事柄の上にのみなり詳にいへば人をして善なる事柄を快として不善なる事柄を不快とせしむる如く盡力することなり。

古來性の善惡につきては種々の議論あり又近時は罪人心理學等の研究も始まりて人の中に先天的に罪人たらざるを得ざるものあり、如何にすとも改むべからざる下愚のものありとの事なれど、吾人の實驗の敎ふる處に從へば多くの人は敎育によりて惡も善に愚も賢に導くを得るものなれば（或程度まで）吾人が人をして善なる事柄を快とし不善なる事柄を不快とせしむるための盡力は決して無功のものにはあらじ。

故に敎育の眞義は人をして不快をも求め、快をも避けしむてふ無益なる勞力にあらで善を快とし不善を不快とせしむるにあり（善とは何ぞやに至りては倫理哲學の問題として予別に說あり今略す）

心理學上快不快の意義をたづぬるに、快とは慾望の滿足せられたる心の狀態にして不快とは是に反す、又之を一面より見れば快なるが故に之を慾望し不快なるが故に之を忌避す即快不快と慾望とは相互に原因結果を爲すものなり。

慾望の種類甚多し、肉體的のものあり、精神的のものあり精神的のもの、中にも個人的なるあり、社會的なるあり而之等諸慾望の中吾人は何れに重きを置くべきか常識に於ては肉體的の慾望は又之を獸慾ともいひて

卑しきもの抑壓すべきものとし、社會的慾望を以て高等なる慾望なりとなせども等しく吾人が自然に賦與せられたる慾望なるを何故に一を下等とし一を高等とし、一を抑えて他を揚ぐるか吾人は何を標準として理性と、動物性とを區別するかは實に重大なる問題にして倫理學に於ける研究なり。

そは、とまれ角まれ、吾人の經驗によるに、吾人が或一事に對するや吾人の精神の上には種々の慾望起る、若、小兒の如く單純にして或場合に只或慾望のみ起りたらんには只其慾望を、追求し之を得ると否とによりて快不快を生ずるなれども大人に於ては決して、然く單純なることを能はず或場合には大抵種々の慾望起る、即肉體上の慾を滿足せんとすれば其所に名譽の慾起り其所に正義の情起るが如し、斯くて此慾望相互の間に競爭制剋起り慾望の陶汰作用行はれ即比較的勢力の强き慾望が最後の勝利を得るに至る。

此、慾望の相互制剋即陶汰作用といふことは自然の作用にして吾人が如何ともしがたき所なり吾人が務め得るところのものは只、各慾望中高等なるもの即善なる慾望を敎育して是をして最强からしめ是をして最後の勝利を得しむるにあり、言換ふれば高等なる慾望を最快とするごとく導くにあり。

當代佛國有名の社會學者哲學者フーイエ氏は其著國家敎育論に於て「敎育は理想を陶汰して往く仕事でなければならぬ種々の善良な理想を其腦髓に作らせて、さうして其理想の力を强くして精神界を陶汰して行くことである」といへり氏は理想と慾望とを同意に用ゐたる事多く此所に理想といふは則予の慾望といふに同じかるべし、即敎育の仕事は種々善良なる慾望即理想を作らしめて其勢力を强固にし他の欲望を制して精神界

を陶汰することなりといふなり。

斯くて教育の眞義は善良高等なる慾望の勢力養成にありこれ即善を快とし不善を不快とせしむるなり、されば此意義に於て感情教育ともいひ得べきか但高等感情の教育なるを以て寧理性教育若くは理想教育といふの至當なるを覺ゆ。

序に慾望と智意との關係につきて一言せんに教育の眞意が高等慾望の養成にありといふとも吾人が慾望を直接に教育することは實に至難にして其最捷徑は實に智識にあり今一例を擧げて之をいはんに、こゝに如何に水を飲まむことを慾求するものなりとも之に顯微鏡によりて其水中には恐るべき無數の微菌あることを見せしめば其慾求を斷念するなるべしされば高等なる慾望の善良なる所以を哲學倫理社會學其他日新の科學によりて明瞭に了解せしむることは實に高等慾望教育の第一必用條件なり然れども之をして十分なる勢力を得しむるためには意志によりて實行せしめ進んで習慣となるに至らしめざるべからず、こゝに於て教育の目的は高等感情の養成にして其方法は智及意に待たざるべからず。

從つて教育の眞の目的は智育若くは意育にあらずして高等感情の教育にあり。

斯くて次に來るところの問題は其謂はゆる高等感情とは何ぞやなり然れども此問題は實に人生窮極の目的如何を決定するにあらざれば解すべからず蓋感情の中に於て高下の別を附する所以のものは人生窮極の目的てふ一標準に外ならざればなり、而、此問題は實に倫理哲學の範圍に屬す、こゝ少しく予の之に關する意見を聞け。